

特定非営利活動法人

レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク会報

2019年
5月1日
No. 114
隔月1回発行

ひきこもり



イラスト
高津



会報は札幌市さぽーとほっと基金助成事業・ひまわりピア・サポート基金により作成されています

Index

- 2ページ サテライト・カフェ in 小樽を開催 ひきこもり外交官が語る
KHJ全国大会 in 北海道 10月に札幌市で開催ほか
- 3ページ 2019年度新規助成金事業～ひきこもりピア・アウトリーチ活動
ひきこもり地域拠点型居場所移行支援
- 4～5ページ
ひきこもりカフェ in 札幌～親と当事者が語る生き方・考え方
- 6ページ 札幌市が実態調査結果を公表 ひきこもり約2万人
HBCの情報番組に当 NPO 理事長がVTR出演
- 7ページ 書評 〈働くこと〉とピア・サポートのあいだ 著者・坂本凌雲 氏
- 8ページ こちら事務局／編集後記

サテライト・カフェin小樽を開催
ひきこもり外交官が語る

4月17日水曜日、3年目の継続開催となる「ひきこもりサテライト・カフェin小樽」では、大阪からひきこもり外交官のさえきたいちさんにご登壇いただきました(写真・1)。参加者からはさえきさんとお会いすると安心できるという声寄せられました。

お話の中では親が何とかしなければという不安や焦りから良からぬ支援に巻き込まれないように、ひきこもり8050問題は80と50は切り離して考えることが重要。その上でいろいろと悩みながらも自分のことは自分で考えて決めていくという本人の貴重なプロセスを奪わずしっかりと踏むことにつながる、というところはポイントです。

情報誌「北方ジャーナル」6月号にさえきさんが話した内容が4ページにわたり掲載されています。



(写真・1) 会場の小樽市保健所の会議室で語るさえきたいちさん(左)は昨年引き続き2回目の参加。

2019年度第1回理事会を開催
新年度の活動が開始される



(写真・2) 理事会議長を務める田中理事長

4月27日土曜日、当NPO法人の2019年度第1回理事会(写真・2)を開催し、2018年度収支補正予算案、事業報告、収支決算、財務諸表の注記、寄付者状況、監査報告、2019年度事業計画案、収支

KHJ全国大会 in 北海道が10月
札幌市で初開催

5月13日第1回KHJ全国ひきこもり家族会連合会主催全国大会 in 北海道現地実行委員会が開催され準備がスタート。本日付で田中敦理事長は現地事務局長(財務担当)に就任した。全国大会は10月12日(土)・13日(日)2日間に渡り札幌市で開催。全大会、分科会に分かれ当事者、家族、支援者らが全国から集り高齢化するひきこもりの課題解決に向けて議論を深める。

KHJ 全国大会 in 北海道「ひきこもり者が生きる力を育む地域共生社会に向けて」

基調講演:田中 康雄 氏(こころとそだちクリニックむすびめ院長)

基調報告:境 泉洋 氏(宮崎大学教育学部准教授)

行政説明:安西 慶高 氏(厚生労働省 社会・援護局地域福祉課課長補佐)

シンポジウム「地域共生社会へ向けて、ひきこもり者をどう支えていくのか」ほか

とき:2019年10月12日(土)午後12時~17時 13日(日)午前9時~12時

会場:北海道立道民活動センター「かでの2.7」4階大会議室

住所:札幌市中央区北2条西7丁目 道民活動センタービル

申し込み:9月15日までにKHJ全国大会 in 北海道実行委員会までFAX、メール、郵送で申し込む

資料代:一人参加2,000円、家族参加2,500円、学生参加500円、当事者参加 無料

懇親会費:5,000円(参加希望者のみ)

資料代、懇親会費は事前の振り込みが必要

詳細は主催の全国KHJ家族会連合会北海道「はまなす」特設ホームページをご覧ください。

<http://hokkaido-hamanasu.com/>

2019年度新規助成金事業①
ひきこもりピア・アウトリーチ活動

2019年9月をもって当NPOは創設20周年を迎えるため原点に立ち返り、設立以来実践してきた手紙を活用したピア・アウトリーチをはじめ市民向け情報発信や居場所づくりを再考し、さらに効果的なピア・アウトリーチ活動を促進していくことを目的に①手紙(絵葉書)によるピア・アウトリーチ活動、②市民向け情報通信(会報「ひきこもり」)によるピア・アウトリーチ活動、③身近な地域におけるひきこもりの居場所づくりとしてのピア・アウトリーチ活動(SANOGOの会・毎月2回開催)を実施します。

本事業の特徴は、①と③をコラボレーションさせ他者に会えない人だけでなく居場所参加者で最近姿が見えなくなった人などにさりげなく気に留めて手紙の郵送を試みることや、②を①③と連動させ情報が幅広い人たちに届くよう心掛け当事者同士が情報通信を媒介して交流できるように努めるなど、従来独立で運用してきた①②③各事業を複合的に組み合わせ実践にあります。各事業の相乗効果を検証し、さらなるひきこもりピア・アウトリーチ活動範囲の創意工夫や活動領域の発展促進に寄与させていきます。

本事業は2019年度札幌市市民まちづくり活動促進助成金を得て「札幌圏ひきこもりピア・アウトリーチ活動促進事業」として実施します。

2019年度新規助成金事業②
ひきこもり地域拠点型居場所移行支援

本事業は、集団支援としての居場所支援が実施されているが体制が脆弱でうまく居場所移行支援ができていない札幌圏地域における居場所として小樽市、苫小牧市、江別市を選定し、それぞれの地域の行政や支援団体機関との連携を図りながら当事者団体である当NPOを中核とした支援団体機関連携協同企画による札幌圏ひきこもり地域拠点型居場所移行支援開発事業を実施します。本事業では居場所移行支援開発に必要な主たる課題となる①人づくり(当事者の思いを汲み取りやすい支援スタッフの形成)、②場づくり(当事者が参加しやすく、安心して一歩踏み出すことができる時間帯の形成)、③方法づくり(当事者にとって心身に無理のない望ましい支援の形成)の各項目を明らかにし、地域における居場所を拠点に①家族支援から個別支援への移行、②個別支援から集団支援への移行並びに③集団支援から社会参加支援へのスムーズな移行が可能となる実証的研究を展開し、その成果を導き出す目的で実施します。

既に4月より開催している「ひきこもりサテライト・カフェin小樽」は毎月1回の開催が決定(8ページ参照)、苫小牧市、江別市は各自自治体と協議を続け今年度4～5回の開催を予定しています。本事業は2019年度日本社会福祉弘済会社会福祉助成金…研究事業として実施します。

 ご寄付ありがとうございます

小西 恵司 様 3千円

小松 英行 様 2万円

当事者活動を円滑にすすめていくために活用していきます。



「天中に舞うクジラ」イラスト 小松英行

2019年3月4日、札幌市の委託事業「集団型支援拠点設置運營業務」居場所「よりどころ」親の会 当事者会の合同企画として「ひきこもりカフェ in 札幌」を開催。会場に集まった当事者や家族、支援者ら60名を超す参加者は、当事者、親の立場から1名ずつ登壇しその思いを聴き理解を深めた。

常識に縛られない子育ての大切さ～鈴木祐子氏（小樽不登校ひきこもり家族交流会世話人）

親代表として語ったのは不登校のわが子と向き合いながら2004年からひきこもり家族会の運営に携わっている鈴木祐子氏（写真-1）。1997年、当時小学校6年生だった息子が不登校になったのは晴天の霹靂だった。強権的な教師による仕打ちや同級生からのいじめが原因で息子は朝から嘔吐が激しくなるなど身体の状態が著しく悪くなった。学校からは不登校になっては困ると指導を受けたため息子をなだめながら学校へ連れていったが状況がさらに悪化。学校にも相談したが「家庭の問題」と処理された。

五里霧中の鈴木氏にとって天使病院・南部医師（故人）との出会いが子どもに対する価値観を大きく変える力となった。初めての受診で息子は「学校へ戻りたい」と言った。南部医師からは「子どもの心は学校へ行きたいと思っているが身体は学校へ行けない。心と身体がバラバラだ」と指摘を受けた。その後も通院のたびに親がもつ常識にしばられない関係づくりを伝授。とくに「子どもの好きにさせなさい」「学校へ行くのは諦めなさい」「母はニコニコしちゃっく」この3つの教えを家庭で実践した。また熊本大学の三池輝久教授の共著作「学校過労死」で語られていた「子どもの脳が停止する」という状況が、息子の状態と一致すると理解した鈴木氏は「学校を休ませる」「子どもの好きにさせる」「すべてのことは子どもに任せる」ことを実行した。その結果息子の身体的な状況は驚くほど改善された。同時期にひきこもりの家族会「ななかまどの会」（現在休会）にも参加し代表の久野信さん館山隆さんから薫陶を受け親のもつ狭い考え方の転換を図った。親が感情的に困り感を抱くのではなく冷静に状況をみつめ学習し親子関係のもつれた糸をほぐしていった。

息子は3年4か月後に不登校を脱し定時制の高校へ進学し卒業した。就労の経験はあるが体力的に馴染めず働くことを断念。現在もひきこもり生活が続く息子との生活を鈴木氏は次のように語った。「息子は祖父母の葬儀に出席し愛犬の死を看取ってくれた。一見すると何もしていないように見えるが、彼なりに家庭内で役割を果たしている」。

不登校やひきこもりで悩む家族に対して鈴木氏は「当事者を操作するのではなくまずはいろんなことを親自身が学んでほしい」と述べ、家族会でテキストとして使用したことがある「親業」に関する資料を基に、親子の対話の仕方、親の愛情をどのように示すかなど学ぶことの意義について語った。また医療関係者も認める「ほめ言葉」を発する効果についても言及した。

最後に鈴木氏は20年以上に及び家族会で語られた当事者7人の自死について触れ、20代の自死が多く、そこに至るまでのプロセスを気付けなかった親の後悔があるという。そこには本人にしかわからない深い闇があるのだ。鈴木氏は「親のもとで子どもが生き続けると思い込むのは大きな間違いだということ」を心の片隅に置いてほしい」と締めくくった。

鈴木氏は20年以上ひきこもり当事者や家族へ向けて絵葉書を送付する活動を実践している。そこには何かしらの生き甲斐があるように感じる。ひきこもり続ける子どもから学び、気づき、親自身が生き甲斐を得る。鈴木氏のしなやかでありながらも筋の入った生き様が理解できる内容だった。



（写真-1）推奨する書籍を紹介する鈴木祐子氏

皆様からの投稿をお待ちしています

〒064-0824 札幌市中央区北4条西26丁目3-2

「NPO 法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」事務局 通信編集部 宛

e-mail ; info@letter-post.com

内省して考えることの大切さと当事者会の効用～マインド 氏（旭川当事者会 NAGI）

当事者を代表して登壇したマインド氏は、ひきこもり状態から現在に至るまでのプロセスを終始冷静な面持ちで語ってくれた。

マインド氏は大学在学中就職活動が続けることが心理的に無理だと悟り、卒業後は就職せず無業となる。親の理解も得られず周囲からはひきこもりに対する否定的な声が聞こえてくる。「ひきこもりは本人の責任である」「大学を出たから何かしなさい」など世間の常識が自分自身をも縛る。しかしそれが本当の「真理」なのだろうかという疑念を抱きながらひきこもりという「五里霧中」から抜け出すために自分に出来る唯一の方策として「考える」という作業を続け、どん底に陥り何も価値を見出せなくなる体験を経ることで常識に縛られた自己を解放させた。「自己責任とは言い変えると自由意思で何でもできるということになるが、これは非常に傲慢で他者や自然や環境を想定せず自分だけの力で生きているという考え方でおかしい」時折語気を強めながら語るマインド氏は、自分のおかれている状況を冷静に捉え直し世間がもつ基準に合わせず、社会に出ていけない原因を自分に求めず当事者も親も「自己責任」という言葉の呪縛から解き放されることが一つの救いになると訴えた。

ひきこもりながらも原付バイクに乗りキャンプ場に行き、緩やかに他者と関わる経験を積みながら徐々に元気を取り戻してきたマインド氏は2015年1月に当NPOが主催したイベント「ひきこもり大学・旭川校」に参加し、同イベントがきっかけで創設された当事者会「NAGI」に毎月1回参加し続けるようになる。当事者会の効用についてマインド氏は次のように述べた。「多くの人がもっている現実とは違う現実を一人で生きるのはとても大変なこと。当事者会にはひきこもりという類似のアイデンティティを持っている人たちが集まり悩みを共有し合うことで自分のひきこもり経験が安定化する作用がある」さらに続けて「ひきこもりの人は一度社会の常識に触れている。その社会に戻れないとすればその常識とどう折り合いをつけていくか内省して考える作業が当事者には必要だ」と述べ、安心して考えることができる居場所に価値があることを強調した。このような当事者会での思いを糧にして積極的に活動している当事者の経験談を聴きながら、少しずつ後押しされるなかで2016年12月当NPOが主催した「道産こもり179大学 in 津別」では自らが講師役を担った。

最後にマインド氏は「自分のなかに芽生える葛藤と向き合い新しい考え方にたどり着くには時間が必要だ。働けない自分を責めるのではなく様々な要素の重なりによって今の自分があることを知り、抱えているコンプレックス(感情の渦)を見つめ直し、受容することができてはじめて今後のことを考える余裕が生じてくる」と述べ、ひきこもりで悩む当事者や家族へ言葉を投げかけた。マインド氏自身はいまでも、社会をどう生きるかと模索を続けている最中だが、ひきこもりという経験ができたからこそ内省することの大切さを理解し実践してきたのだろう。ひきこもり経験を活かした人生に対する考え方を学ぶ機会となった。

後半に行われた対話交流では(写真-2)では、「よりどころ」のピアスタッフ5名がテーブルオーナーとなり、以下の内容で参加者と交流した。

①「ボランティア」ひきこもり者の自信にもつながり社会復帰を目指す。②「外へ出ていく」外へ出ていく以外にも自分の気持ちを外へ向けるなど広い意味で捉える。③「当事者会」当事者会とはどのような内容なのかを理解してもらう。④「次の一手」ひきこもる生活の先に何があるのか建設的に語り合う。⑤「フリーのテーブル」困りごとを含め何でも自由に話し合う。このほか前段で話題提供した講師2名を囲んだテーブルをつくり、より深く講師の思いや考えを聞いた。

満場の拍手で幕を下ろした「ひきこもりカフェ in 札幌」は、参加した当事者や家族の方々が会場設営や後片付けを率先して手伝うなどイベントを盛り上げ、官民が協力してはじめて実施した居場所「よりどころ」の盛況ぶりが伺えた。2019年度は当NPOが引き続き居場所「よりどころ」を運営することが決定。開催日程については、8ページを参照。



(写真-2) 参加者の前で各テーブルオーナーが話し合いたい内容を説明する

札幌市が実態調査結果を公表

ひきこもり約2万人 中高年のひきこもり長期化傾向

札幌市は2018年度に15～64歳までを対象としたひきこもりに関するランダムサンプリング1万人実態調査を実施。その結果が4月28日付北海道新聞に掲載された(写真1)。

記事によれば、身体の病気はないのに6か月以上ほとんど家から出ないひきこもり状態の人は1万9千823人、このうち15～39歳は6604人、40～59歳は8128人、60～64歳は5091人と推計。ひきこもり状態の当事者に聞いたところひきこもり期間

は40～59歳で「7年以上」が5割を占め、3年以上の当事者と合わせると7割にのぼる。また関係機関に相談したいかを尋ねる質問には15～39歳の約7割、40～59歳の約5割が「相談したいと思わない」と回答。50代のひきこもりを80代の親が養う「8050問題」が札幌市内でも深刻化している。さらに同時期に当事者や家族に行われた調査では、ひきこもり状態を変えるために行動を起こしたきっかけとして「相談窓口の支援策の存在を知った」と回答した人が半数以上

7年以上が約半数

札幌市調査 長期化する傾向に

札幌市が昨年、15～64歳の市民に行った「ひきこもり」に関する実態調査で、ひきこもり状態の40～59歳の中高年層のうち、期間が7年以上の人は約半数に上り、状態が長期化する傾向が明らかになった。15～39歳では当事者の7割、40～59歳では5割が「支援機関に相談したくない」としており、相談を抵抗感がある当事者への働きかけ充実などが求められそうだ。

「相談したくない」5割

調査は無作為抽出した市民1万人に実施。40歳以上、気はないのに6か月以上、15～39歳は6604人、40～59歳は8128人、60～64歳は5091人と推計した。

札幌市のひきこもりに関する実態調査の結果(%)

ひきこもりの期間	期間					無回答
	6か月～1年	1～3年	3～5年	5～7年	7年以上	
15～39歳	11.1	16.7	16.7	22.2	22.2	11.1
40～59歳	14.3	14.3	10.7	10.7	50.0	
60～64歳	4.8	33.3	14.3	4.8	33.3	9.5

支援機関に相談したいか	回答				無回答
	非常に思う	思う	少し思う	思わない	
15～39歳	16.7	5.6	66.7	11.1	
40～59歳	7.1	14.3	28.6	46.4	3.6
60～64歳	14.3	4.8	9.5	61.9	9.5

期間を聞いて「7年以上」が約半数に上った。40～59歳は思わない「思わない」と回答。「思わない」の肯定派は計2割にとどまった。60～64歳でも「思わない」が約6割に上った。40～59歳は思わない「思わない」が46.4%、肯定派は50%だった。

アンケートとは別に、当事者と家族1377人に同時期に行った調査では、56.7%が、ひきこもり状態を変えるために行動を起こしたきっかけとして「相談窓口の支援策の存在を知った」ことを挙げた。調査を担当する市子どもの権利推進課は「相談に抵抗感がある当事者でも参加しやすい支援策を充実させ、当事者や家族への周知を強化する必要がある」としている。

(写真-1) 2019年4月28日付北海道新聞

を占めていたこともあり、札幌市は「相談に抵抗感がある当事者でも参加しやすい支援策を充実させて周知を強化したい」と述べたと報じた。

3月29日には内閣府は40～64歳の「ひきこもり中高年者」の数が約61万人に上ったと発表し厚生労働大臣が「新しい社会的問題だ」との見解を示している。

HBCの情報番組に 当NPO理事長がVTR出演

3月19日火曜日、HBCテレビ「今日ドキッ」で「8050問題札幌で孤立死」を特集し(写真2)当NPOの田中敦理事長がVTRで出演し「8050問題はひきこもりだけではなく介護離職して認知症の親の介護をしている世帯にもみられる」と述べ、ひきこもりに特化されない高齢世代が持つ普遍的な課題であると指摘した。



同番組では一人暮らしの50代当事者の生活も紹介され、生きにくい社会の片隅で細生きの姿が映し出されていた。

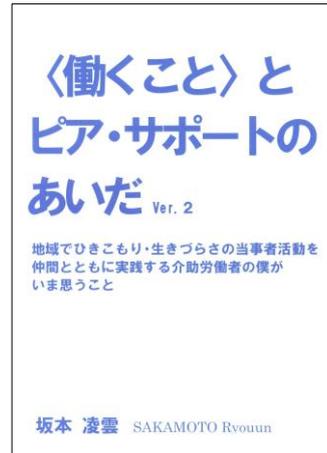
(写真-2)

書評 〈働くこと〉とピア・サポートのあいだ 著者 坂本 凌雲 氏
田中 敦

ひきこもり経験者の一人として家庭を持ち本業である仕事をする傍ら地元でひきこもり当事者会や家族会、さらには居住地域活動に尽力し続ける東京都在住の坂本凌雲氏がこのたび新刊冊子本「〈働くこと〉とピア・サポートのあいだ」を刊行した。

A5判全88頁に及ぶ本編には当NPOが2年間にわたり企画し主催したセミナー「それぞれの経験的知識がつなぐひきこもりピア・サポート（2016年）」並びに「ピアが織りなすチカラとともに働き合うジョブサポート（2017年）」における発表内容を土台にしつつ新たに加筆修正した構成となっている。

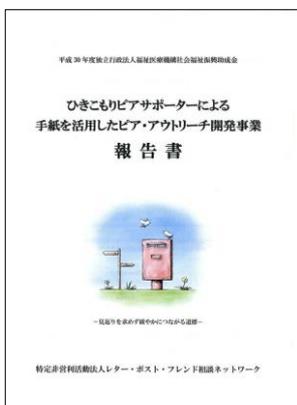
本小冊子の冒頭で「地に足が着いた生き方」を標榜しているように何かきらびやかな世の中から脚光を浴びるような仕事を追い求めるだけではなく、まさに自分が「世の中から必要とされること」に気が付きそこへシフトする意義を唱えている。著者がこうした見解に辿りつくまでの「あいだ」にはさまざまな人生の葛藤や生い立ちがあったことが本小冊子から伝わってくる。もちろん「世の中から必要とされること」を自ら実現するためにはそれをやりこなせる力量を身に着けなければならないが、著者の姿からは日々悩みながらも有意義な人たちの出会いや直面し体験してきたさまざまな経験値がそれを乗り越えていく一つの糧となっている。



2019年1月に東京で開催された「KHJ自分プロジェクト・自分らしい生き方シンポジウム in 関東 2018～こんな生き方、働き方あってもいいよね～」の登壇と併せて本小冊子は刊行された。既刊書「自立への漂流」をさらに読みやすく、必要される多くの人たちの手元に届けたい、という著者の実直な思いが凝縮されている。またひきこもり経験者としてあまり語られることが少ない「定年後の人生をどう生きるか」についても触れられている。

世の中から必要とされる生き方は自分の本当にやりたかったことにつながるプロセスであり、自分自身への道標であるといえよう。

問い合わせ先 hiki.place@gmail.com
(坂本さん) 頒価 500円



☆刊行物のご紹介

①長期在宅ひきこもり当事者支援向け家族アセスメントツール開発事業報告書～ひきこもり 8050 問題と生命の危機予防福祉推進へ向けて

A4版モノクロ 35頁 郵送料込1冊 600円

②手紙を活用したピア・アウトリーチ開発事業報告書一見返りを求めず緩やかにつながるための道標ー (左写真)

A4版モノクロ 62頁 郵送料込1冊 800円

刊行物については事務局までお問い合わせください

私たちの仲間になりませんか 会員募集をしています

正会員

入会金 1,000円

年会費 3,000円

賛助会員

入会金 1,000円

年会費 2,000円

寄付金

一口 1,000円～

入会金、会費納入は、下記郵便振替口座へのお振り込みでお願いします。

●口座記号番号 02700-4-66261

●加入者名 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク



◆「SANGOの会」例会のご案内

2019年6月は下記日程にて行います。初めての方も参加できます。概ね35歳前後のひきこもり当事者や経験者で、人との関係や会話に慣れたいと思っている方、またいろいろな情報を得たいと考えている方は、いらしてください。詳細は事務局までお問い合わせください。初めて参加される方で、少人数で会うことを希望される方は、事前に事務局までメール、電話でお問い合わせのうえ初心者の例会にお越しください。

《初心者の例会》

とき：6月26日(水)午後5時30分から7時30分まで

会場：札幌市社会福祉総合センター4階 札幌市ボランティア活動センター ボランティア活動室

(札幌市中央区大通西19丁目1-1 地下鉄東西線西18丁目駅下車徒歩3分)

《通常例会外企画》6月12日(水)「円山動物園」見学。集合場所等は事務局までご連絡ください。

随時、当NPOのホームページで公開していきますのでご確認ください。http://letter-post.com/

◆居場所「よりどころ」開催のご案内(2019年6月~7月)

(当事者会)6月17日(月)6階・和室研修室「樹」/7月1日(月)10階・1010会議室※

7月15日(月・祝)6階・和室研修室「樹」

(親の会)6月10日(月)10階・1010会議室/6月24日(月)10階・1010会議室※

7月8日(月)10階・1010会議室/7月22日(月)10階・1010会議室※

開催会場：北海道立道民活動センター「かでる2.7」(札幌市中央区北2条西7丁目 道民活動センタービル) JR札幌駅南口から徒歩13分

開催時間：いずれも午後1時30分~4時まで

利用対象：ひきこもり当事者及びその家族

参加費：無料 事前申込不要 直接会場にいらしてください。※印の日はひきこもり地域支援センター相談員の参加予定日です。

◆公益社団法人北海道社会福祉士会道央地区支部会員サロン・講演会開催のご案内

テーマ「ひきこもり支援の理解と専門職に期待すること」

講師：田中 敦(NPO法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク理事長)

とき：7月20日(土)午前10時00分から12時00分まで

会場：砂川総合福祉センター4階和室(砂川市北7条西4丁目) JR砂川駅から徒歩10分

参加費：会員無料 非会員500円

申込方法：7月12日までにFAX(011-261-4144)まで申込書を送付

詳細は公益社団法人北海道社会福祉士会道央地区支部ホームページで確認ください

http://douou-csw.jp/

◆「ひきこもりサテライト・カフェ in 小樽」開催のご案内

今後の開催スケジュール(6月以降)6月19日(水)7月17日(水)8月21日(水)

9月18日(水)10月16日(水)11月20日(水)12月18日(水)

2020年1月15日(水)2月19日(水)3月18日(水)

とき：午後2時00分から午後4時00分まで 出入り自由

会場：小樽市総合福祉センター4階和室(小樽市花園2丁目12番1号)

参加対象：ひきこもり当事者及びその家族など

参加費：無料 事前申し込み不要 直接会場へいらしてください

後援：小樽市・北海道新聞社

☆ 編集後記 ☆

いくつもの生きる支えをもっていない人たちは次のステージを歩むべき意欲をつくれず、ときとして周囲の無理解や偏見にさらされ追い詰められることが多いです。ひきこもりの正しい理解とかかわり方を多くの人たちに知ってもらうことが悲劇を繰り返さないことにつながると思います。

(発行責任者 理事長 田中 敦)

無 断 複 製 は お や め く だ さ い